

ふじみ町みんなのおうち ～2020年からの軌跡～

山下 陽子

(コミュニティ福祉学科2005年卒業)

はじめに

「まなびあい」が卒業以来開催されていることは存じ上げていた。“福祉の概念を持った人こそ「私には福祉は関係ない」と思う圧倒的大多数の中で、学びの力を発揮するべき“という理想を掲げた22歳の私は、卒業後一般企業（金融機関）に就職した。そして、この「まなびあい」のご案内を頂くたびに、いつかこの場で何かを発表できるような「コミュ福魂」を体現した活動をしたいという思いを呼び覚ましていただく一方で、「普通のサラリーマン」と「普通のお母さん」の日に追われる自分に「ああ私は大学を出て何をしているんだろう」と落ち込んだりもした。この場に立つまでに卒業から早20年が経ってしまったが、今回このように執筆させていただくこととなり、ある種目標の一つ叶えた喜びを感じている。

この活動報告では、私が東京都立川市に立ち上げた「ふじみ町みんなのおうち」について報告する。

ふじみ町みんなのおうちとは

「ふじみ町みんなのおうち（以下みんなのおうち）」とは、所謂、地域の居場所、サードプレイスのような場所である。活動の中で、「立川市協働型地域福祉アンテナショップ」という立川市の掲げる施策の方向性と合致したこともあり、認定第1号もいただいた。

「居場所」の特徴を大きく以下2種類に分類すると、「みんなのおうち」は多様型に属する。

「同質型」 同じような趣味・話題・課題や生きづらさ、悩みを持った方が集う場所

「多様型」 老若男女、「誰でも」集う場所

名称：「ふじみ町みんなのおうち」

活動開始日：2021年3月～

活動日（＝おうちびらき）：原則月2回（第2日曜午前、第2日曜午後）

活動内容：【第2日曜午前】みんなで朝ごはん／【第4日曜午後】地域住民によるワークショップ

上記いずれもメインイベントとしての活動であり、同じ空間にいてその活動に参加するかしないかは自由。「おうち」なのでゴロゴロするだけ、おしゃべりする、ワークショップには参加せず遊ぶ等各々の好きなように過ごすスタイル。

運営スタッフ（＝おうちびと）：地域住民 ※詳細は後述

「みんなのおうち」のスタート

2020年秋、私は「みんなのおうち」の具現化に向けて、まずは地域活動のキーパーソンとの目線合わせから始動した。

それまで（今もだが）、金融機関に勤めていた私は、自分の住む地域において、地域資源につながるような人脈もなかったのだが、偶然に子どものつながりで知り合ったAさんが立川市の社会福祉士会にも属する方で、この構想を社協職員や地域のキーパーソンにつなげてくださった。

そこで、「まずはこのエリアで地域のために活動をする方との意見交換、ニーズの確認をする」ことを目的に社協の地域福祉コーディネーターのアレンジにより2回ほど地域のキーパーソンの方に集まっていただく機会を得た（以下、この集まりを便宜上「地域懇談会」とする）。

【集まっていたいた方】

社協職員

富士見子ども会連合会長・副会長

小学校PTA会長

子ども向けのおもちゃの貸与や居場所づくりを隣町でしている方

児童館職員

老人会会長

上記の方にお集まりいただきその時点での構想や計画をお話し、ざっくばらんにご意見を頂戴し、課題を整理し、今後のご協力を仰ぐこととなった。

地域懇談会を経て、「みんなのおうち」は以下のイメージで進めていくこととなった。

①児童館をはじめ既出の地域資源との不足を補う意味で日曜日を「おうちびらき」の日とする。

子どもの主な居場所となっている児童館は日曜休館なので、子どもたちに日曜の居場所の選択肢を増やすため、日曜開催をメインとする（主催者が平日勤務者のため平日の開催は不可能）。

- ②サービス提供者とサービスを楽しむ側という構図は作らない。

「おうち」にサービスをする／してもらおうという構図はない。参加者の自主性や自由な発想で、自然発生的に成り立つ場を目指す。それによって、福祉事業者でもなく、町会（こども会、老人会）でもなく、PTAでもない、参加者みんなまで唯一無二の地域資源を作り上げる。

- ③「子どものための居場所」「高齢者のための居場所」ではなく、「みんなの居場所」として開催する。

世代や性別、“子育てママ”などの同質・共通課題に着目した場所づくりは行わない。

- ④開催場所について

富士見町協和会公会堂にて第一回を開催できることとなった。

本来であれば町会員のための施設であるが、趣旨に協賛いただき町会外の市民の利用にも承諾いただいた。（老人会会長さんのご尽力によるところが大きく、実はこの方は私の立教での恩師、故・森本佳樹先生と旧知の間柄である方だった。）

なおその後は、地域の公民館を継続利用している。

- ⑤初回の運営スタッフ

この構想の具現化のため、地元の信用金庫とコミュニティビジネスのコンサルタント会社が主催するセミナーにも参加していた。そこで「フォロワー」として私の構想の具現化の協力を手を取ってくれたメンバー（大学生～社会人）が初回スタッフとして運営の準備～当日の開催まで力を貸してくれた。

また、地域懇談会でつながった方も当日のメンバーとして参画して下さることになった。

第一回開催～その後のみんなのおうち

第一回の開催は2021年3月に連続した2日間で行い、地域懇談会の出席者の方が地域への認知度を上げてくださったおかげで100名近い来場者を迎えることとなった。

当初2日間をトライアルで開催後の継続有無については、自分自身が会社員であることもあり決めかねていた部分もあったのだが、開催してみて地域の多くの方に「こういう場所欲しかったです」というありがたいお言葉もいただき、「これからも続けたい」という気持ちが出てきて、その後は継続して毎月2回やり続けます！と正直「おち上げて」しまった。

その後、宣言通り毎月2回、「おうちびらき」をしている。参加者は毎回20名前後となっている。地域へ開催に関する宣伝は主にはInstagramとLINE公式アカウントを活用、大型のイベント（夏祭りや講演会等）を開催する際には、児童館等へのチラシ貼り出しや社会福祉協議会のホームページや地域向けの案内物に掲載いただくなどしている。



Instagram

【第2日曜：午前開催】

開催内容：みんなであさごはん

みんなで楽しみながら作れる簡単メニューで、あさごはんを食べる。

メニュー：タコライスやおにぎらず、焼きそば等

【第4日曜】

開催内容：みんなの得意で遊んでみよう

地域の方の持つスキルを活用させていただきながら、ワークショップのような形で様々な講座を開催。インスタや「私今度これならできるよ」という地域の方の声掛けで何となく続けることができています。

これまで開催したワークショップ：パン作り、ピーズ手芸、AED使いかた解説、茶道、くつ下で縫いぐるみづくり、陶芸、等。

なお、重要なこととして、いずれの開催内容に日も、「今日は〇〇の日なので、必ずこれをしてください」という強制はしない。おうちであり、居場所なので、いずれのイベントも参加も可、イベントに参加せず、他の遊びをする、おしゃべりする、なんでもOKのスタンスをとっている。

子どもたちも「ごはんはいらなくて」と宣言してひたすらおにごっこに興じたり、茶道を学ぶ大人の横で座布団団で「椅子取りゲーム」をしたりと、かなり自由な空間になっている。

活動資金については、社協や財団からの助成金をメインに活用している。そのほか企業が運営する地域の居場所や子ども食堂への食糧支援を活用させていただくこともある。



活動の様子

これまでのあゆみを支える「おうちびと」のこと

2021年3月より、これまでこの活動を支えてくださる「おうちびと」がいる。主には当初の地域懇談会でつながった方、それから私の子どもたちの育児を通じて知り合った「パパ友」「ママ友」(もはや戦友!)たち、子どもの保育園時代にお世話になり現場を引退された先生、当初手伝ってくれた大学生、それから立川市社会福祉協議会の方々などが参加してくださっている。

「おうちびと」はグループラインを通じて、会場予約や次の開催内容の相談などをやり取りしている。おうちびとは、皆それぞれに仕事を持って平日を過ごされている方ばかりである。

今回、活動報告をまなびあいに提出することをおうちびとのグループラインで伝えたところ、下記のような声をいただいたので、原文のまま転載させていただく。

「会社員をしながらライフワークとして運営に携わっている方達との出会いにより、大学卒業後仕事(ライスワーク)として福祉業界で働くだけではない、地域や福祉への関わり方もあると感じた」

「高校生や大学生も社協を通じてボランティアに来ているので、現在学生の皆さん(または卒業生でご関心のある皆さん)も地域福祉の実践への入り口としてぜひみんなのおうちに遊びに来てほしい」

活動を始めた当初より「ライフワーク」「ライスワーク」は様々な方からの頻出単語となっている。

私自身現在の「ライスワーク」から、生きがいややりがいのすべてを見出すことは難しい。「みんなのおうち」を始めて、私自身が「ライフワーク」を得て、精神的にとっても安定したと実感しているし、それだけではなく、仕事で得た知識が「みんなのおうち」の運営に活かせることも多々あるし、逆に「みんなのおうち」を通して学んだことで、「ライスワーク」をする上で視野の広がりを感じることもある。

町会でもPTAでもない、唯一無二の存在として、今来てくれている子どもたちが大人になり、私たちがおじいちゃん、おばあちゃんになり、その時にもみんなが帰ってこられる「みんなのおうち」をゆるゆると続けていきたい。

さいごに～「みんなのおうち」を設立したいと思い立つまでの私～

コミュ福で学びたいとおもったきっかけ

設立の経緯は高校生の私にまで遡る。私は、認知症の祖母が入所していた老健でボランティアをしていた。祖母と言えば、5人の子どもがいて、その子どもたちが孫たちを連れて集まる年に数度の機会には、料理に腕を振るい、少し(いや、

だいぶ) ふくよかなその体を揺らしながら大勢の中でケタケタと笑っている人だった。

老健での祖母は遠くを見つめて、同じように遠くを見つめる高齢者の人たちと、同じテーブルに並んで、決まった一日のプログラムの中で過ごしていた。「人の最期ってこれでいいのかな」と高校生の私の中に疑問が湧いた。

その後、私は海外に約1年留学した。何を考えたか英語も拙いはずの私が選んだのはドイツの高校で、当然に重度のホームシックにかかってしまった。しかし、ここに大きな収穫があった。「言葉が通じない」=他者とのコミュニケーションができない状況に私は一つ気づきを得たのだ。それは「自分が消えていく感覚」である。

目の前の他者の中に自分が存在することで自己を認識できるという心理学的な感覚を体感したのはこの時だった。そして、その感覚を得て思い浮かんだのは老健の祖母だった。

この経験により、誰もが最後まで人との自然な交流を失われることなく生きられる社会を作りたいと思い、コミュニティ福祉学部での4年間を過ごすことになった。

突然のマイノリティとみんなのおうちの始動

冒頭でも記した通り、大学を卒業した私は高らかな理想を掲げつつも、現実には「普通」のサラリーマンと「普通」のお母さんだった。3人の子どもに恵まれ、幸せだけど忙しい。そんな日々だった。

そんな日々突然のアクシデントが降りかかる。会社の健康診断を受診したある日の翌日に、検診を受けた病院から電話がかかってきたのだ。「乳がん」だった。

30代での乳がんは所謂AYA世代、若年性乳がんの部類に入る。混乱の中でネットを漁ると、割とたくさん団体の居場所があった。Instagramでも「#乳がん」などで検索すると、治療を受けている人たちのコミュニティとつながることができた。もちろん「同じ病と闘う人がいる」という感覚は安心もしたし、その後の抗がん剤等の苦しい治療の中で同じ痛みや突然焦点が合ってしまった死へ不安を分かち合えることは私を癒してくれたけれど、「乳がんの私」というカテゴリーでしか痛みや混乱を分かち合えないことには違和感を覚えた。

人は誰も、その人なりの課題を抱えるときがくる。「元気な人」「普通な人」のコミュニティと「課題を持った人」がいるコミュニティに分離していくような構図ができやすい世の中では、思わぬ変化や望まぬ病に接した時、その二元論がその人自身を苦しめることにつながるだろうと思った。

「みんないろいろあるよね」「でも、これからもここで一緒に生きていこう」と日常が続けられる度量のある社会や地域の中で生きたい、「乳がん」は私に、コ

ミュ福で学び卒業した私の抱いていた気持ちをまた運んでくれた。そうだ、いまこそ、「みんなの居場所を作ろう」と。

大学時代、地域福祉ゼミに属していた私は故・森本佳樹先生にお世話になっていた。

その際先生に「あなたのいいところはなんか頼れる近所のおばさんの雰囲気や学生の今から持っていること。それは地域福祉をやっていく人材としてとても大切なことなんだよ。」と言われた。なんとも失礼(?)な発言にも聞こえるが、その時そうおっしゃっていただいた言葉を私はずっと大切にしてきた。

「森本先生。

正真正銘のおばさんになった今ですが、私は“頼れる近所のおばさん”になっているでしょうか。」

偏りなくあんなこともこんなこともそれなりにできて、新旧問わず受け入れる柔軟性を持って元気に楽しく、文句を言わず、この人となら楽しいことができそうだと思うようなドスンと構えた近所のおばさん／頼れる同僚／なんだかいい感じのお母さん。

先生がおっしゃってくださったような未来を歩めているなら幸せだなと思います。

今回はもっと学術的に活動を取りまとめたいと思っていたが、なかなかそこには至らなかった。しかし、コミュ福を卒業した私にしかできない活動を始めて、そのことを大学で発表するという最低限の目標は叶えることができた。

これからもライフワーク、ライスワークの二足の草鞋で歩いていく。

そしてまたいつの日にかまなびあいでご報告ができるよう、努めていきたい。

この活動報告をお読みいただいた学生の方、卒業生の皆様、もしよかったら「みんなのおうち」に遊びに来てくださいね！